

およぶ・達する・つく(着)・とどく

杉本 武

1. はじめに

ここで取り上げる「およぶ」「達する」「つく(着)」「とどく」は、いずれも国立国語研究所1964では、「2.152₁移動・発着」に分類されている。これら四語は作用の伝播、物の質的・量的変化、人・物の移動などを表わす。しかしこれら四語すべてに共通する用法はなく、複雑な重なり合いを見せる。本稿では四語の用法がどのような重なり合いを見せるのかを考慮しつつ意味分析を行ないたい。なお四語のうち「つく」は国立国語研究所1964で、「就く」と表記されて「2.111関係」、「付く」と表記されて「2.156₀接触・接近」にも分類されているが、ここでは「着く」と表記される場合のみを取り上げることにする。

2. 分析の前提・方法

動詞の意味というものが考えられるのは、基本的にはその動詞がある文の中で実際に使用された場合である。そしてこの場合の「意味」はある用例における動詞の意味である。しかしこの無限にある用例を意味の共通性によって分類すると、いくつかの(一つの場合もありうる)グループに分けることができるだろう。そして同じグループに属する用例はすべて、その動詞の同じ用法であると規定する。そしてある用法の意味とはそのグループに共通する意味のことである。これが動詞の意味の一般化の第一段階である。つぎに考えられるのは、この用法の意味を一般化することによって用例・用法を超えたいわば裸の動詞の意味に至ることである。

このように、用例における動詞の意味、用法における動詞の意味、裸の動詞の意味という一般化の段階を考えたが、では実際の意味分析を進める上でどのような手順をとったらよいのだろうか。まず問題になるのは動詞の用例の分類である。これをするには一文一文に現われる動詞の意味を記述し、それを意味的共通性に基づいて分類するという方法(いわば意味的一般化)もあるが、この意味記述を経ずに用例の分類はできないものだろうか。一つの動詞における用法の違いは、その動詞の用例による統語的性格の違い、あるいは構文の違いに現われるのではないだろうか。すなわち用例の分類をなんらかの統語的テストによって行なえな

いだろうかということである。そこで本稿では上記のことを作業仮説として、用例の用法への分類をすることにする。

最後に、用法における動詞の意味と、それをさらに一般化した裸の動詞の意味との関係であるが、意味を素性の束と考えると、裸の動詞の意味は、すべての用法に共通の基本的な意味素性と選択的な意味素性(その選択は用法によって異なる)とから成ると考えられる。

以上のような前提に基づき、以下で分析を進めてみたい。

3. 統語的分析

3. 1. 他動詞文との対応

本稿で取り上げる四つの動詞はいずれも自動詞である。そのうちのいくつかは対応する他動詞形を持つ。しかし対応する他動詞を持つ動詞でも、用例全体に対応があるわけではない。そこで他動詞文との対応を調べることによって用例を分類してみることにする。

3. 1. 1. およぶ

「およぶ」は対応する他動詞「およぼす」を持つ。例えば、

- (1) 被害が 全国に およぶ。
- (2) 被害を 全国に およぼす。

のような例で、他動詞文では自動詞文のガ格がヲ格になる。同様に以下に例文を挙げる。

- (3) 日本の圧力が 中国に およぶ。
- (4) 日本の圧力を 中国に およぼす。
- (5) 話が その問題に およぶ。
- (6) 話を その問題に およぼす。
- (7) 会議が 深夜に およぶ。
- (8) *会議を 深夜に およぼす。
- (9) 機動隊が 実力行使に およぶ。
- (10) *機動隊を 実力行使に およぼす。
- (11) 人出が 十万人に およぶ。
- (12) *人出を 十万人に およぼす。

このように(1)(3)(5)の用例については対応する他動詞文があるが、(7)(9)(11)にはない。そこで(1)(3)(5)(7)(9)(11)の用例を(1)(3)(5)と(7)(9)(11)とに分け、両者を別の用法であ

るとし、前者を「およぶA」後者を「およぶB」と呼ぶことにする。

3. 1. 2. 達する

「達する」は自動詞として使われる他に、「目的を達する」のように他動詞としても使われるが、以下でみるように自動詞と他動詞は対応しない。

- (13) 部隊が 目的地に 達する。
- (14) *部隊を 目的地に 達する。
- (15) 損失が 一億円に 達する。
- (16) *損失を 一億円に 達する。
- (17) 目的を 達する。
- (18) ?目的が 達する。

(17)の他動詞の「達する」は「しとげる」という意味であるが、この意味は自動詞の「達する」にはない。また他動詞の場合でも、「仕事を達する」が使えないように、「目的を達する」という以外では使われないようである。

「達する」には以上のように対応する他動詞文がないので、ここでは用例を分類できない。

3. 1. 3. つく

「つく」には「着く」と表記される場合、対応する他動詞はない。

- (19) 列車が 駅に つく。
- (20) *列車を 駅に つける。

しかし、

- (21) 船が 岸に つく。
- (22) 船を 岸に つける。

のような例があるが、(22)は「付ける」と表記され、(21)が到着することを表わすのに対し、(22)は接岸することを表わすので対応していない。

3. 1. 4. とどく

「とどく」には対応する他動詞「とどける」がある。

- (23) 荷物が 家に とどく。
- (24) 荷物を 家に とどける。
- (25) 知らせが 彼のもとに とどく。
- (26) 知らせを 彼のもとに とどける。

しかし次のような例には対応する他動詞文がない。

- (27) 吊り革に 手が とどく。
- (28) *吊り革に 手を とどける。
- (29) 品物の山が 天井まで とどく。
- (30) *品物の山を 天井まで とどける。

ここで(29)は、品物の山のてっぺんが天井に触れるよ

うになるという意味であるが、(30)の文はその意味を持たない。奥津1967の

二つの動詞があり、自動〔- Transitive〕他動〔+ Transitive〕という対立、およびそれに必然的に関連する特徴のちがいを除いては、全ての文法的、意義的特徴を共有する時、この二動詞間に自他の対応がある、と言う。(p. 49)

という定義に従うと、この場合「とどく」と「とどける」が対応しているとは言えない。

このように「とどく」には(23)(25)のように対応する他動詞文がある用例と、(27)(29)のようにない用例がある。そこで両者を別の用法であるとし、前者を「とどくA」、後者を「とどくB」と呼ぶことにする。

3. 2. 構文

つぎに四語がどのような構文で使われるかをみてみる。その際、以上で調べた用法で分けて考えることにする。なお用法の違いは(A)(B)で示す。

まず「およぶ」であるが、

- (31) 津波の被害が 内陸部に およぶ。 (A)
- (32) 国家の統制が 国民の思想に およぶ。 (A)
- (33) 機動隊が 実力行使に およぶ。 (B)
- (34) 負傷者が 千人に およぶ。 (B)

のように(AXB)ともにガ格とニ格をとる。しかし、

- (35) 津波の被害が およぶ。 (A)
- (36) 国家の統制が およぶ。 (A)
- (37) *機動隊が およぶ。 (B)
- (38) *負傷者が およぶ。 (B)

のように、(A)ではニ格を省略できるが、(B)ではそれができない。したがって「およぶA」の構文は〔N₁ガ(N₂ニ) およぶ〕、「およぶB」の構文は〔N₁ガN₂ニ およぶ〕である。

つぎに「達する」では

- (39) 車が 交差点に 達する。
- (40) *車が 達する。
- (41) 利益が 十億円に 達する。
- (42) *利益が 達する。

のようにガ格とニ格をとり、ニ格は必須である。したがって「達する」の構文は〔N₁ガN₂ニ達する〕である。また「つく」は

- (43) 太郎が 駅に つく。
- (44) 太郎が つく。
- (45) 頭が 鴨居に つく。
- (46) 頭が つく。

のように、〔N₁ガ(N₂ニ) つく〕という構文をとる。し

かし次のようにカラ格はとりにくいようだ。

- (47) ?伯父が 大阪から 東京に つく。
最後に「とどく」は
(48) 材料が 工場に とどく。 (A)
(49) 注文した本が 書店に とどく。 (A)
(50) 棚の上の花瓶に 手が とどく。 (B)
(51) 屋根に 梯子が とどく。 (B)

のように(AXB)ともにカ格とニ格をとり、

- (52) 材料が とどく。 (A)
(53) 注文した本が とどく。 (A)
(54) 手が とどく。 (B)
(55) 梯子が とどく。 (B)

のようにニ格は省略できる。ではカラ格はどうだろうか。

- (56) 材料が 倉庫から 工場に とどく。 (A)
(57) 注文した本が 出版社から 書店に とどく。(A)
(58) ?ベッドから 棚の上の花瓶に 手が とどく。(B)
(59) ?地面から 屋根に 梯子が とどく。 (B)

このように「とどくA」はカラ格をとれるが、「とどくB」はとりにくいようだ。また(58)(59)はむしろ

- (60) ベッドからなら 棚の上の花瓶に 手が とどく。

- (61) 地面からなら 屋根に 梯子が とどく。

と言うべきところであろう。また「とどくA」のカラ格は起点を表わすが、「とどくB」のカラ格は起点というより基準点を表わしているようだ。

ここでは「とどくA」は〔N₁ガ(N₂カラ)(N₃ニ)とどく〕という構文をとり、一方「とどくB」は〔N₁ガ(N₂ニ)とどく〕という構文をとるとし、「とどくB」のカラ格については後で少し触れたい。

また「とどくA」「とどくB」ともに、ニ格の代わりにマデ格もとるが、本稿では同列に扱うことにする。

- (62) 荷物が 家に/まで とどく。
(63) 頭が 鴨居に/まで とどく。

3. 3. まとめ

ここで以上の用例の分類、つまり用法をまとめておく。

	対応する他動詞	構文
およぶA	お よ ぼ す	N ₁ ガ(N ₂ ニ)_____
B	ナ シ	N ₁ ガN ₂ ニ_____
達する	ナ シ	N ₁ ガN ₂ ニ_____
つく	ナ シ	N ₁ ガ(N ₂ ニ)_____
とどくA	と ど け る	N ₁ ガ(N ₂ カラ) (N ₃ ニ/マデ)_____
B	ナ シ	N ₁ ガ(N ₂ ニ/マデ)_____

4. 意味分析

4. 1. ニ格を必ずとる用法

以上のことをもとにして、これから四語の意味分析を行なうが、まずはニ格を必ずとる用法と、任意にとる用法とを分けて考えてみたい。

ニ格を必ずとる用法は「およぶB」と「達する」である。そこでまず両者の例文を挙げ、「およぶ」と「達する」で言い換えができるか調べてみる。

- (64) 機動隊が 実力行使に およぶ。
(65) *機動隊が 実力行使に 達する。
(66) 会議が 深夜に およぶ。
(67) ?会議が 深夜に 達する。
(68) 死傷者が 百人に およぶ。
(69) 死傷者が 百人に 達する。
(70) *寄付金が 目標額に およぶ。
(71) 寄付金が 目標額に 達する。
(72) *当惑が 極度に およぶ。
(73) 当惑が 極度に 達する。
(74) *台風が 伊豆沖に およぶ。
(75) 台風が 伊豆沖に 達する。

まず(74)(75)からわかるように「およぶ」は移動(言い換えると位置変化)を表わす場合には使われない。移動の「達する」は「つく」とも関係があるので後で詳しくみたい。

ところが問題なのは、第一に(68)~(71)のように数量変化を表わす場合でも「およぶ」と「達する」の両方が使えたり、片方しか使えなかったりすること、第二に(64)(73)はともに状態変化を表わすのに、それぞれ「達する」「およぶ」で言い換えができないことである。以下でこの二点を順に考えていきたい。

まず第一の数量変化を表わす場合であるが、言い換えができる例をもう少し挙げてみよう。

- (76) 人口が 一千万人に およぶ。
(77) 人口が 一千万人に 達する。
(78) 軍勢が 一万人に およぶ。
(79) 軍勢が 一万人に 達する。

これらの例文に「とうとう」という副詞を入れてみると、

- (80) *人口は とうとう 一千万人に およんだ。
(81) 人口は とうとう 一千万人に 達した。
(82) *軍勢は とうとう 一万人に およんだ。
(83) 軍勢は とうとう 一万人に 達した。

のように「およぶ」は使えなくなる(なお文を自然なものにするために、カ格を主題化し、動詞を完了時制にした)。このことから「達する」は数量がある時点に

においてある値をとることを表わすのではなく、だんだんと増加してある値になることを表わすということがわかる。一方「およぶ」は数量がある時点においてある値をとっていることを表わす。したがってその値が増加の結果でなくてもよい。

(84) 今年度の予算は 42兆円に およぶ。

このように考えると、(71)は「目標額」という語が、額がだんだん増加してある額になるということを含意するので、「およぶ」が使えないと考えられる。

また「およぶ」は数量の多さに対する言語主体の驚嘆を含意するので、数量の多い場合にしか使われない。

つぎに状態変化の場合であるが、用例が少なくはっきりしたことは言えないが、「およぶ」は、ある状態からある状態へ変わった結果を表わし、「達する」はある状態が高じた結果を表わすようである。

また(66)のような用例をどう考えるかもまだはっきりしていない。

4. 2. ニ格を任意にとる用法

ニ格を任意にとる用法は「およぶA」「つく」「とどくA」「とどくB」である。このうち「およぶA」は他の語と言い換えができない。

- (85) 被害が 全土に およぶ。
- (86) *被害が 全土に 達する。
- (87) *被害が 全土に つく。
- (88) *被害が 全土に とどく。

「およぶA」が使われるのは、作用などのいわば抽象物がある範囲に広がることを表わす場合であり、以下にみるように、「つく」「とどく」は具象物にしか使われず、「およぶA」とは用例が重ならないので、本稿ではこれ以上の分析は加えないことにする。

そこで以下では「つく」と「とどく」について分析を加えたい。まず「つく」の用例を挙げてみよう。

- (89) 列車が 上野に つく。
- (90) 小包が 事務所に つく。
- (91) 頭が 鴨居に つく。
- (92) 足が 川底に つく。

ここで(89)(90)の「つく」は移動を、(91)(92)の「つく」は移動というより接触を表わしている。

つぎに(89)~(92)の「つく」を「とどく」で言い換えてみると、

- (93) *列車が 上野に とどく。
- (94) 小包が 事務所に とどく。
- (95) 頭が 鴨居に とどく。
- (96) 足が 川底に とどく。

のように、移動の場合には言い換えができたりできなかったりし、接触の場合には言い換えができるようだ。また(94)は対応する他動詞文が存在するので「とどくA」、(95)(96)は存在しないので「とどくB」である。

(97) 小包を 事務所に とどける。

(98) *頭を 鴨居に とどける。

(99) *足を 川底に とどける。

そこで次は移動の「つく」と「とどくA」についてみてみたい。まずガ格にどのような名詞がたつか調べてみよう。

「つく」の場合は、

(100) 太郎が 家に つく。

(101) 渡り鳥のむれが シベリアに つく。

(102) 車が 交差点に つく。

(103) 材料が 工場に つく。

のように、人・動物・動く機械(乗物など)、物のいずれもガ格にとる。つぎに「つく」を「とどく」で置き換えてみると、

(104) *太郎が 家に とどく。

(105) *渡り鳥のむれが シベリアに とどく。

(106) *車が 交差点に とどく。

(107) 材料が 工場に とどく。

のように、ガ格が人・動物・動く機械の場合には「とどく」は使えない。しかし(104)は、「太郎」が意識不明だったりして自分では動けず、他人に運ばれた場合には言える。したがって、「つく」はガ格にたつものが自ら動き、ニ格の地点に移動すること、「とどく」はガ格にたつものが外力によってニ格の地点に移動することを表わすと言えそうだ。しかし(107)や次の(109)のように「つく」は外力が存在する場合でも使える。

(108) 書類が 会社に とどく。

(109) 書類が 会社に つく。

したがって「とどく」は外力によってガ格にたつものがニ格の地点に移動すること、「つく」は外力の有無を問わず、ガ格にたつものがニ格の地点に移動した結果、つまり到着を表わすと言えそうだ。また「とどくA」はカラ格をとるが、「つく」はとらない。このことから考えると、「つく」は到着に着目し、その経過は問題にしないと言えそうだ。一方「とどくA」は到着までの経過も含んで表わす。森田1977にも同様の記述がある。

「つく」は到達点Bへの到着や接触のみを問題とし、「AからBまで」という距離意識がない。(中略)「つく」は「…につく」であって「…までつく」ではない。(p. 326)

このことは「つく」に、「付く」と表記する接触動詞としての用法があることからもうなずける。

つぎに接触の「つく」と「とどくB」についてみてみよう。まず「とどくB」の用例を挙げてみる。

(110) 天井に 手が とどく。

(111) 屋根に 梯子が とどく。

(112) 品物の山が 天井まで とどく。

ここで「とどく」はガ格にたつものがニ格の地点に触れることを表わす。

つぎに(110)~(112)の「とどく」を「つく」で置き換えてみると(なお「つく」はマデ格をとらないのでニ格に変えた)。

(113) 天井に 手が つく。

(114) *屋根に 梯子が つく。

(115) *品物の山が 天井に つく。

のように、(110)は上記のような意味を持ちながら、「つく」で言い換えられるが、(111)(112)ではそれができない。しかし(114)(115)の例を下のようにすると言い換えられる。

(116) 屋根に 梯子の先が つく。

(117) 品物の山のとっぺんが 天井に つく。

同様に、

(118) 鴨居に 背が とどく。

(119) *鴨居に 背が つく。

(120) ?鴨居に 頭が とどく。

(121) 鴨居に 頭が つく。

のようになる。

以上のことから考えると、「とどくB」はガ格にたつものが、地面などの基準点とニ格の地点を結びつけること、「つく」はガ格にたつものがニ格の地点に接触することを表わすと言える。

ところで先に、「とどくB」はカラ格をとらないとしたが、「とどくB」では基準点は言語の上では表現されずに、言語主体の意識の中にあるのではないだろうか。

4. 3. 「達する」と「つく」

4. 1. で「達する」は移動も表わすと述べたが、ここでは「つく」との比較において移動の「達する」を考えてみたい。

まず「達する」のガ格にどのような名詞をとるか調べてみると、

(122) ランナーが 中間地点に 達する。

(123) 渡り鳥のむれが 日本海に 達する。

(124) ロケットが 木星に 達する。

(125) *材料が 工場に 達する。

のように、人・動物・動く機械のいずれもガ格にとれるが、自ら動かない物とはとれない。

さらに「達する」は自然現象をガ格にとれる。

(126) 台風が 伊豆沖に 達する。

さて「達する」はガ格に人・動物・動く機械をとる場合には「つく」で置き換えられる。

(127) ランナーが 中間地点に 達する。

(128) ランナーが 中間地点に つく。

(129) 渡り鳥のむれが シベリアに 達する。

(130) 渡り鳥のむれが シベリアに つく。

(131) 車が 交差点に 達する。

(132) 車が 交差点に つく。

しかし、

(133) ?ランナーが ゴールに 達する。

(134) ランナーが ゴールに つく。

のように「達する」が不自然な場合がある。また(131)(132)のような場合でも、少しニュアンスが違うようだ。(131)の場合には、車が交差点を通過してしまうことを含意するが、(132)にはそれがなく、むしろ交差点で止まることを含意する。こう考えると(133)もゴールを通過してさらに進むということになり不自然な文になると考えられる。

5. まとめ

以上の分析の結果を下にまとめておく。

● およぶ / N₁ガ (N₂ニ) _____

「ガ格の作用がニ格の範囲に広がること」

/ N₁ガ N₂ニ _____

① 「ガ格にたつものの数量がニ格の値をとること」数量的に多い場合に使われる。

② 「ガ格にたつものの状態がニ格の状態に変わること」

● 達する / N₁ガ (N₂ニ) _____

① 「ガ格にたつものの数量が増加してニ格の値になること」

② 「ガ格にたつものの状態が高じてニ格の状態になること」

③ 「ガ格にたつ人・動物・動く機械がニ格の地点に移動すること(ニ格の地点より先に進むことを含意する)」

● つく / N₁ガ (N₂ニ) _____

① 「ガ格にたつ人・動物・動く機械・物がニ格の地点に移動すること(移動の結果

つまり到着に着目する)」

②「ガ格にたつものがニ格の地点に接触すること」

●とどく/N₁ガ(N₂カラ)(N₃ニ/マデ)_____

「ガ格にたつものがカラ格の地点からニ格あるいはマデ格の地点に外力によって移動すること」

/N₁ガ(N₂ニ/マデ)_____

「ガ格にたつものが地面などの基準点と

ニ格の地点を結びつけること」

以上のように用法ごとにその意味を記述してみたが、一つの用法の中にいくつかの記述があること、用法の意味の記述であって、動詞の意味の記述になっていないことは問題として残るだろう。また分析方法の検証も必要だろう。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生
3歳～ 埼玉県朝霞市

たどる・つたう・つたわる・なぞる

西牧 みやま

1. はじめに

「たどる」「つたう」「つたわる」「なぞる」は、あるものが、径路に沿って(あるいは径路上を)移動することを表わす、という点で意味の共通性がある。しかし、移動するものや径路の質、移動の仕方などには相違がある。そこで、ここではこの四語の用いられる文型を分類し、例文をつくり、その例文を通して四語の差異を比較・分析してゆきたい。

2. 分析

2. 1. 文型A「(N₁ガ・ハ) N₂ヲ ~」について
……(N₁=移動の主体の場合)

2. 1. 1. 「N₁(=移動の主体)」

- (1) 彼は 家路を たどる。
- (2) 泥棒は 屋根を つたう 逃げた。
- (3) 音は 空中を つたわる。
- (4) 私は 手本を なぞる。

(1)~(4)の例文のように、文型Aについては四語とも使える。しかし、(1)~(3)までの例文では「N₁ガ・ハ(N=名詞)」にあたるものが移動の主体になっているが、(4)では「N₁」にあたる「私」が移動の主体になっているわけではない。(4)は、ことばを補って次のように言いかえることもできる。

(4) 私は 筆で 手本を なぞる。

(4)では、移動の主体は「筆」である。「なぞる」について、「N₁」にあたるものが移動の主体になる場合があるか、いくつかの例文をあげて考えてみよう。

- (5) *彼は 家路を なぞる。
- (6) *泥棒は 屋根を なぞって 逃げた。
- (7) *音は 空中を なぞる。

- (8) 私は 谷川を たどって 山小屋に着いた。
- (9) *私は 谷川を なぞって 山小屋に着いた。
- (10) 私は 険しい山道を たどって 頂上に着いた。
- (11) *私は 険しい山道を なぞって 頂上に着いた。
- (12) 涙が 頬を つたう。
- (13) *涙が 頬を なぞる。
- (14) 熱が 鉄板を つたわる。
- (15) *熱が 鉄板を なぞる。

以上は、文型Aで、「たどる」「つたう」「つたわる」が言えて、「なぞる」が言えない例である。これに対し、文型Aで「なぞる」が使えるのは、次のような例文である。

- (16) 彼は うまく書けないので 手本を なぞった。
- (17) 私は 不鮮明な文字を なぞって はっきり読めるようにした。
- (18) 私は トレーシングペーパーを重ねて 地図を なぞった。

(16)~(18)では、「N₁」が移動の主体になっていない。「N₁」以外が移動の主体になる場合については別の文型で検討することとし、ここでは分析の対象を「たどる」「つたう」「つたわる」の三語にしぼる。

○「N₁(=移動の主体)」が生物の場合

- (1) 彼は 家路を たどる。
- (19) 蟻が 砂糖の跡を たどる。
- (20) 私は 谷川を つたう 山小屋に着いた。
- (21) 彼女は ロープを つたう 二階から庭へ降りた。
- (22) 私は 長い廊下を たどって/つたう 広間に出た。

以上のように、「N₁」が「生物」の場合「たどる」